

凄テクに十分間耐えたら

十万円&即ハメ！

金欠の優太は町中で素人童貞として、><に出るようスカウトされる。オフィスに赴いてみると、そこにいた男優は幼馴染の恭で——!?

挑むは優太が恭の凄テクに耐えることができれば十万円獲得のうえ、恭に生ハメするとう企画だった。

優太は恭の凄テクに耐えることができるのか…!?

急に緊張してきて、膝の上で拳を握る。すぐにこの履き古したチノパンも脱ぐことなるのだろうか、と考えてしまつて手のひらに汗が滲むのがわかつた。

「心の準備はできたかよ」

恭はそう言つて隣に腰を下ろした。味気ない石鹼の香り。きつと直前に身を清めてきたのだろう。そこまで考えてはたとした。

「ま、待つて、僕シャワーも浴びてないんだけど…」

「はあ? 別に構わねえよ、オレは」

ニヤリ。犬歯を見せて笑う表情にどきつとする。というかこれからえっちなことをすると思うだけで勃起してしまいそうな自分がある。

この雰囲気のせいなのか、彼が放つ色香のせいなのかはわからないがとにかく頭が沸騰しそうだった。

「ゆでダコみてえな顔。エロいことで頭いっぱいかよ？」

「そりゃ、そうもなるだろ……」

「お前……本当に童貞なんだな」

しげしげと恭に上から下まで見られながらそう言われ、う、と口ごもる。

幼い頃からの付き合いだ。おまけに幼い頃の僕は一つ年下の彼に対してお兄さん気取りで格好をつけていた。そしてそんな僕を彼もまるで兄のように慕ってくれていたのだ。

「……童貞です……」

その「お兄ちゃん」が二十歳になっても童貞とあつては失望されるかもしれない。なんとなく気恥ずかしくて弱々しく呟いたが、恭は意に介した様子はなかった。

「へえ〜？」

ニヤニヤと笑いながら恭がこちらへ頭を傾ける。僕をからかうときの彼の癖だった。

「ま、なんでもいいわ。そろそろ始めるぞ」

「えっ!? 待って、心の準備が……」

「ンなの待つ気はねえよ」

心の準備はできたのかって君が聞いてきたんだろ！

恭が距離を詰めてきた。太もも同士が触れる、普段ならば気にしないだろうその接触到すら今は何かを思わずにはいられない。意外にもやわらかくてあたたかい体温にどきまぎした。

「う、うわ……」

「もうちよつと勃ってるじゃねえか」

呆れた声。だって、だってこんなに近いから！ 耳元で喋るから！

「ンなんじゃ保たねえぞ？ 十万なんて夢のまた夢だな」

ふーつと耳に息を吹きかけられて、くすぐったさとかすかな快感に肩をすくめながらいやいや、と気を取り直す。

ベルト外しな、お兄ちゃん？ 耳元で囁かれるざらついた声に、もうやるしかないと腹を括った。

促されるままに自らベルトを緩める。金具が立てる無機質な音を聞いて、間抜けだなあと思うのには止まらない。くつろげたチノパンからボクサーパンツが覗いて見える。その下であからさまに質量を主張しているペニス先走りすら浮かべていた。

「どこも触ってねえのに元氣だな、おい」

笑って、恭が床に膝をついて僕の足元へと陣取る。そこじや寒いだろうとか、膝が痛いんじゃないかとか言う前に恭の右手が股間へ伸びてきた。太ももからつう……とチノパンの縫い目をなぞりあげてきた。指がそのまま下着へと触れる。先走りの染みを確かめられ、ふっと息が乱れた。

「う」

「じゃあ、タイムースタートするぞ」

「え、今!? じゃあ今までののは!？」

「今までののは挨拶だ」

「挨拶だったのか!」

まずい、挨拶で勃起してたんじゃかなり不利なんじゃないだろうか。一回仕切り直しかできないのかこれ。

タンマを叫ぶも恭は無視して僕の下着からペニスを取り出してしまふ。見慣れた自分の息子の顔が見えて、おまけに先走りの雫が先端に浮かんでいてパニックになった。

「ウワ〜ッ!？」

「いちいちうるせえな! 黙れ!」

「痛っ!」

恭の鉄拳が飛んできて、強制的に黙らされた。その間にもペニスは手でもてあそばれていて、やわらかく亀頭を撫でられている。

「童貞ってことは他人に触られんのも初めてだよなあ？　いつもどっちの手でシコってんだよ」

「ひ、左……だけど」

「へえ」

恭がペニスを右手で握り込んだ。大きくて自分とは全く異なる体温に握り方、その全てに覚える違和感が性感へと即座に変わってゆく。

ゆるゆると確かめるように触っていた手元に恭が首を伸ばしてペニスに唾液を落とした。途端にぬるついた感触に変わり、手のひらと竿が擦れる。

「うわ……」

なんだそのエロい技は。セックスビデオでも見たことがないぞ。いや僕が見ているものが一般的すぎるだけで、もしかしたら普通にあるプレイなのかもしれないけど。

くちゆり、いやらしい水音が立って上下に恭の手が動いた。次第に速度を増していくそれに簡単にペニスが固くなってゆく。水音も激しさを増して、はっと熱い息が漏れた。

「っ……」

「気持ちいいのかよ」

「こんなことされたら、そりゃ……」

かすかに掠れた恭の声が聞こえる。無自覚なのかわざとなのかわからないけど、こんな場面で聞く彼の低い声はあまりにも卑猥でペニスがぐんと硬くなった。

それを「硬くしてんじやねえよ、おすわりしてな」と揶揄されて、屈辱感に興奮してしまふ。く、くそう、これが恭の実力なのか。

根本から先つぽまでスナツプを効かせて擦られる。自慰では聞いたこともないくちゆくちゆという水音と、すぐそばにある恭の体温に脳が沸騰しそうだった。ぐ、と袋が持ち上がって、射精欲がどんどん高まっていく。

「うぐ、あ、恭、ちよ、ちよつと待ってくれ……っ」

「待つわけねえだろ」

やっぱり童貞じゃ十分間耐えるなんてのは無理そうだなあ？ そう言つて恭が亀頭を手のひらに包み、まるで磨くかのように強く擦り上げた。

「うあッ、あ……！」

あまりに直接的すぎる快感に思わず身をよじれば、恭がおもちやを見つけたと言わんばかりに楽しそうに笑った。

「先っぽ弱すぎだろ、ウケるわ」

「や、やめっ、うッ……ぐう……！」

ぐちぐちと手のひらと亀頭が強く擦れるたびに大きな水音が鳴り響く。これらの音がカメラやマイクにも拾われるのだろうかと思うと羞恥を覚えるのに口から漏れる喘ぎを堪えられなかった。

人から触られているだけでもたまらないのに、こんなに弱点を集中的にいじめられたら頭がおかしくなる。

「っは、あ、亀頭、つよっ……」

「ザコ亀頭がなんだって？ 強い？ じゃー優しくしてやるよ」

「は、あああ……っ！」

指先でカリの段差をごく優しくくすぐられた。打って変わっての微弱でゆるい、けれど的確な愛撫に腰が引けてしまう。ふ、ふ、と短く漏らす息が情けなくて恥ずかしい。

「ザコすぎて優しくしてやつても感じまくってんじゃねえか」

恭が馬鹿にするように笑って、手のひらを根本へとずらした。そのまま空いている方の手をいたずらに股下に差し込まれて、袋をやわやわと刺激される。

「うわ、っ……」

「こうやってゆーっくり……扱いてやるよ」

恭が見せつけるように手を上下させる。ペニスの中に留まっていた先走りを押し出すみたいに根本から先端まで擦られて、砲身が脈打つのがわかった。

繰り返しそうしてゆっくりと往復されるうち、玉がずしりと重くなって先走りの量がどつと増えた。

「っは、……ふう……」

「いかせてくださいって情けなくおねだりしろや、お兄ちゃん？ そうしたらシコシコするの早くしてやるよ」

いやらしい誘い文句に目の前がちかちかする。じれったくて、早く射精したくて苛立ちさえ覚えながら首を振った。まだ我慢できる、いや最後まで我慢してみせる。

「頑張るじゃねえか、びゅーってザーメンぶちまけていーんだぜ？」

こんだけ勃起してりやさぞ気持ちいいだろうな、と恭が低く笑う。竿を上から下まで丁寧に扱き上げられて、自分史上これまでにないほど固くなっていることを自覚した。

「嫌だ！ つぐ……！！ 僕は、絶対に、勝つ……ッ」

「チツ……往生際の悪い……」

恭がついに苛立ちを隠そうともせず舌打ちをして手を離した。ようやく凄テクから開放

「っ！」

ぞくぞくと腰から背筋にかけて強い興奮が走った。あたたかい粘膜の感触に反射的に腰を突き上げるが、恭がすんでのところでペニスを口から出してしまったため虚空を貫いただけになった。

「恭……！」

懇願するような、苛立ったような声が出てしまった。

「ぶは、興奮してんじやねえよ」

慌てるな、と恭に窘められるが、こっちは今すぐにだって射精したいんだ。そこまで考えて、いやいや我慢しないとイケないんだった、と思い直す。

僕がここで射精してしまつては恭を守れないことになるからだ。太ももの筋肉に力を込めて快感をどうにか逃がそうとする。

「今度は突き上げてくんじやねえぞ？」

恭が見せつけるように再び大きく口を開けた。はーっと熱い息が先端にふれて、それから唾液で濡れた粘膜に包まれる。ぐちゃり、唾液が泡立って立てる音がした。

恭のざらざらした上顎に擦られながら、喉奥の柔らかい部分へと亀頭が収められる。

そんなに深くまで啜えたら息もできないだろうと思うのに、恭は少しも表情を歪めるこ

となく頭を上下させ、擬似的にピストン運動をし始めた。

もしかしたら慣れているのかもしれない、と考えて胸にちくりと痛みが走って、やはりこんな仕事は続けさせられない、と決意を改める。

「っは、はーっ……う、アあっ」

絶え間なく与え続けられる快感、目の前で繰り広げられる口淫。ともすれば焼き切れた理性で恭の頭を鷲掴みにして好き勝手に腰を動かしたくなってしまうようなほどの強烈な射精欲求。

「ぐ、うう……っ……！」

思わず恭の肩をぐ、と押して突き放せば、フェラチオからは開放されたものの恭の手のひらがすかさずペニスを扱き上げてきた。

唾液でぬるついているそこはなんの抵抗もなく扱かれて、口内で与えられるやわらかい感覚とは違う、あまりに直接的すぎる快感にあつと声がかかる。

「おい優太、そりゃ反則だろ？」

「はあつ、だつて、だつてこんな……っ」

「ああ？ 潔く負けを認めてザーメン出せや」

裏筋にちゅ、とキスをされ、舌をそこに当てたまま手早く扱かれる。

「ほら、シコられんのいーんだろ？」

「う、うう、ううう……！」

そりや気持ちがいい、気持ちがいいけれども負けられない戦いがある。

<中略>

凄テク我慢対決は優太が勝利した。

その結果、△△の企画の一貫と二人の合意でセックスをすることになったものの、あんなにイキがっていた恭は雑魚処女アナルで…？

「や、ゆび、抜け……ッ」

「抜いたらほぐせないだろ？」

「うう、あっ……♡♡へん、なんだよ……」

変？ 聞き返ししながら、腰骨を指先でたどった。恭のペニスは固く反り返っており、先

走りをしとどにこぼしている。

恭が呼吸をするたびにアナルがきゅんと切なくひくついているのがわかって、雄弁過ぎる体にこちらまで息が上がる。

「へん♡っ、あ♡なんかっ……は、ああ……♡つくそ、」

恭が自らのペニスを握った。カウパーを溢れさせ続けていたせいで割れた腹筋に水たまりができてしまっている。

固く勃起したペニスを躊躇なく扱きながら、はーはーと荒い息を吐いた。どうやら快感を堪えられず射精しようとしているらしい。

「っは、んん……っ」

「我慢できなくなっちゃった？」

「るせ、え……！ あ、うう、んあ、あ」

先程僕を苦しめた手付きと同じように、ペニスの根本から先端までをしこしここと慰める手付きは早い。

「はあ……も、いく、はあ、いく……っ」

「オナニーでいっっちゃうの、恭？」

少し咎めるような言い方をしてみたけれど、恭の手は止まらなかった。ふるふると力な

くかぶりを振り、ぐちぐちと激しくペニスを擦る。その間も前立腺はあやしたままだった。あちこちから性感帯をいじられて、たまったものじゃないだろう。

「いく、うう……！♡」

ひととき大きな声で恭がそう言い、ペニスの小さな穴から精液を吐き出した。

びゆる、と勢いよく溢れ出た白濁は恭の鍛えられた腹から胸を汚す。快感に顔をしかめてぴくぴくと四肢を震わせる姿に、生唾を飲み込んだ。未だおぼえたことのない背徳感と支配欲だった。

「は、あはああ、はーつつう♡♡ゆび、抜けっ……！」

「……いやだ」

「はあ？ あ、抜けてえ……っ、あ♡♡うぐう♡♡」

「中、熱くて……きゅーって僕の指、締め付けてる」

恭の性格からして認めるはずないだろう。それでもわからせたいと思った。恭の体が僕を如実に欲していること。

見せつけるようにゆっくり指を手前に引けば、いかないでと引き止めるように内壁が絡みついてくる。恭が切ない声を漏らしたのを聞いて、「ほら」と小さく呟いた。

「気持ちいいんだよね、恭……強がらなくていいよ」

愛おしくて、キスしたくてたまらなくて、無理やり身を乗り出した。

「恭、っ」

唇を近づければ、恭が頭を持ち上げてキスをしてくれた。肉厚な舌がなまめかしく唇を舐めてきたのに興奮して、たまらず唾液が流れ込むのも構わずに口づける。

「ふ、んん、むう、あ」

恭の少しざらついた舌の感触がすっかり好きになっていた。擦り合わせるたびに自分のものではない唾液の味がして、ぞくぞくと背筋が震える。

尖った歯が軽くあたるたびに性感を煽られるのも気が気じゃない。ふーふーと獣のような息をしながら没頭する。

「んんっ♡♡ひ、あッ♡」

キスの合間に漏れる喘ぎがかわいすぎる。前立腺を執拗なまでに撫で続けられれば、恭はぐずるような上ずった声を上げた。

「は、ああ、う♡や、やだ……っあ♡♡ぐ、うう♡♡」

「ううん……」

嫌がることはしたくないって思ってるんだけど、どうしよう。どうしようって、やめてあげるべきなんだろうけど。

こんなに甘えた声出されたら迷うなあ。なんて言い訳をひとり胸中でしながら、聞かなかったことにした。

「は、あーッ♡♡あああ♡♡んん……つい、あ♡♡♡」

「恭、いきそう？」

「い、いくッ……ううう♡♡っお♡♡おっいく、あ♡♡ゆび抜けえ♡♡いくいく♡♡♡」

「いく？」

「いく……！♡♡♡♡」

そのとき、ほんの出来心で——指を抜いた。恭が繰り返し指を抜けと言っていたのが面白くなかったのもある。

あとは、ついさっきあんなにイクのを我慢させられたのが悔しく、苦しく、そして興奮したからだ。

「うっッあ、ああ　なん、で、っ……♡♡♡」

「仕返しだよ」

「うあ！♡♡♡」

再び中へと指を戻す。ローションと先走りでぐちやぐちやになっているそこは侵入を少しも拒まなかった。

もう理解してしまった恭の泣き所に指を宛てがい、息を荒げる恭に構わず愛撫してやる。
「い、クソ、があ♡♡あ♡♡」

ぐりぐり。執拗にそこを揉み込めば、また恭の表情が快感に歪みだした。目を細めて眉を寄せて、必死に酸素を取り込みながら恍惚とした顔になっている。

「う♡う、うう♡ああ、それ、それ……っ♡♡」

「うん？ またイキそうになってる？ いいよ恭」

「いきそ、おおっ……♡♡はああ♡♡いく、駄目だ、そこっそこすぐ、いく……！♡」

また絶頂の寸前で指を抜く。すがつてくる健気な締め付けを振りほどくのはかなり心が痛んだ。質量と快感を奪われた恭の腰が跳ね、宙に尻が浮く。

「あ……！♡♡」

「ごめん、嘘」

「っ死ぬね！ 死ぬね！ なん、でえっ……♡」

凄テクに十分間耐えたら十万円&即ハメ！！
煽りまくってくるメスガキ♂幼馴染に
わからせ中出しセックス！（体験版）

発行者 めでる（やんごとなきイイネ！）

無断転載、再配布を禁止します。